

# 尾道商業会議所記念館 第27回企画展示解説

2015年5月29日～2015年10月14日

テーマ 住友と尾道の歴史再縁～野口孫市と住友建築部～

## 尾道文明開化と住友エピソード

都市銀行である住友銀行（現・三井住友銀行）が、何故尾道に存在し続けているのか？…そこには尾道近代史の一頁に刻まれる深い歴史があった。

明治の御一新覚めやらぬ1873（明治6）年、住友家の尾道分店が土堂町、現在の三井住友銀行尾道支店（本記念館の西傍）の地に開設される。住友ビジネスの柱を成す、愛媛県新居浜の「別子銅山」関係の用度品取扱い、及び商品担保による金融業を担う同店は、四国連絡の海上ルートと、後年に開通する陸上輸送の鉄道ルートを繋ぐ中継基地として機能した。

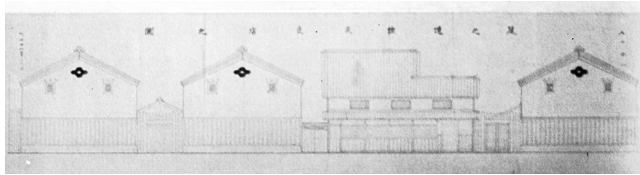
続く1895（明治28）年、住友本店と別子銅山の重役が尾道に集い、住友銀行創設が決議され、ここに近代金融としての銀行業に住友が参入する事になる。この歴史的節目を刻んだ同会議は「尾道会議」と通称され、住友にとっても大きな意味を持つ事になった（それが故に尾道が住友銀行の発祥地になったとされる）。

支店として現在に続く土堂の建物とは別に、市役所傍、米場町（久保1丁目）の一角に、古い時代の住友銀行の建物が現存する。現在、尾道市の所有となっている尾道市労働センターの建物がそれで、これが1904（明治37）年に住友銀行尾道支店として建築された遺構になる。

屋根部分は後に改変されてはいるが、基本的にはほぼ当時の状態を遺しており、近代建築・近代化遺産の一つとして、歴史的価値が認められている。

この建物を設計監理したのが近代建築の名手・野口孫市率いる「住友本店臨時建築部」だった。住友銀行本店建物の建設に伴い臨時的組織として発足した同部は、後に常設組織として存続し、現在の株式会社日建設計がその流れを受け継いでいる。この度の尾道市役所新庁舎建設の設計業者として選定されたのが同社の大阪オフィスで、まさに住友と尾道の歴史再縁が、時を超えて今、再び甦ろうとしている…

本企画展示では、その歴史再縁を偲び、「尾道と住友」の歴史的エピソードを掘り起し、併せて近代化を象徴する鉄道敷設から、尾道駅の開業にもアプローチします。



住友銀行尾道支店図

三井住友銀行尾道支店蔵

## 尾道近代史年表

西暦	元号	事柄
1871	明治4	浜間屋によって港の浚渫（しゅんせつ）実施
1872	明治5	土堂本通りに郵便取扱所（現在の尾道郵便局）開設 尾道町が広島県第十大区（御調）第一小区となる
1873	明治6	尾道-広島間に電信が開通し、久保新地に尾道電信分局設置 尾道に生糸工場開設 久保小学校の前身となる小学溫柔舎が天寧寺境内に開設される 住友家尾道分店（後の住友銀行の前身）開設
1874	明治7	尾道に広島県支庁を設置 尾道港で広島-大阪間の蒸気船の寄港が始まる
1876	明治9	後地（うしろじ）村が尾道町へ合併
1877	明治10	西南の役で、西郷隆盛決起の報が尾道電信分局から中央へ発信される
1878	明治11	尾道初の銀行として国立第六十六銀行開設（のちの広島銀行）
1879	明治12	三軒家町に牛馬の寄合市が開かれる（後の尾道家畜市場） 尾道町を尾崎・久保・十四日（とよひ）・土堂に分ける
1881	明治14	尾道水上警察署設置 尾道家畜市場開設
1884	明治17	大阪商船会社の定期船が尾道港へ寄港開始
1888	明治21	尾道商業学校（後の県立尾道商業高校）開校 尾道港の浚渫を実施
1889	明治22	町制施行で、尾崎・久保・十四日・土堂・東御所・西御所に分ける 栗原沖（西御所・東御所）海面を埋め立て
1891	明治24	11月、山陽鉄道福山-尾道間が開通（尾道駅開業）
1892	明治25	7月、山陽鉄道（現在の山陽本線）尾道から糸崎まで延伸 住友家尾道分店から住友尾道支店へ 尾道商業会議所（現在の尾道商工会議所）開設
1894	明治27	三木半左衛門が千光寺山に共楽園（千光寺公園の前身）を築造開始
1895	明治28	住友本店と別子銅山の重役が尾道へ参集して銀行業設立を決議（尾道会議） 住友銀行尾道支店開設（土堂町の住友家尾道分店地）
1896	明治29	久保銀行浜に尾道貯蓄銀行開設（広島銀行市役所前出張所の前身） 尾道電燈会社が開設され、尾道に電灯がつく 尾道収税署を尾道税務署に改称
1897	明治30	第一尾道尋常小学校として後の久保小が現在地に移転 尾道-今治航路が開設
1898	明治31	尾道市制施行（県下で2番目） 地元の新聞として「黄陽新報」（現在の山陽日日新聞）創刊
1899	明治32	尾道港の浚渫工事が完了 尾道税関監視署新設 三木半左衛門が千光寺山に共楽園（千光寺公園の前身）を完成させる。1902（明治35）年に尾道市へ寄付
1900	明治33	第二尾道尋常小学校として土堂小学校開校
1901	明治34	尾道港の浚渫を再開（以後、11年間に及ぶ）
1903	明治36	山陽鉄道による尾道-多度津航路就航
1904	明治37	住友銀行尾道支店が久保米場町へ新築移転
1905	明治38	尾道塩務局（後に専売局尾道収納所）開設
1906	明治39	尾道に電話開通。当時の市内加入者は141人。 私立の図書館が久保町勤商場に開館。後に市立図書館へ引き継がれる。
1908	明治41	第三尾道尋常小学校として長江小学校開校 市立高等女学校（のちに県立となる。現在の尾道東高校）開校
1909	明治42	四国製煉所からの煙害の賠償交渉会談を尾道の茶園（島居邸と伝）で開く
1911	明治44	尾道-高浜（愛媛県松山市）航路開設
1913	大正2	日立造船向島工場の前身となる水野ドック創業
1914	大正3	私立の図書館が市へ移管され尾道市立図書館（現・中央図書館）開館
1920	大正9	尾道出身の実業家・山口玄洞の寄付で、尾道市実業補習学校（後の明德商業・明德高校、現在の市立尾道南高校）が開校 筒湯小学校開校
1921	大正10	尾道で初めて自動車が行く
1922	大正11	尾道貯蓄銀行が尾道銀行へ改称し、久保米場町へ移転 尾道市職業紹介所（現在のハローワーク尾道）開設
1923	大正12	山口玄洞の寄付金を得て、尾道市上水道敷設工事が着手される 尾道銀行本店開設（後に広島銀行へ吸収）
1925	大正14	上水道敷設が完了し、市内に給水開始 尾道-市村（御調町市）を繋ぐ尾道鉄道開通 旧制尾道中学校（現在の県立尾道北高校）開校

## 現存する旧・住友銀行尾道支店の遺構

尾道市役所北側の界限は、「<sup>こめばちよう</sup>米場町」、江戸期には「<sup>こめばしんち</sup>米場新地」と呼ばれ、その名の通り米穀商が賑わいを見せるスポットであった。この町を貫く通り沿い、老舗酒店に隣接して、アーチ形の意匠が映える洋風建築が建つ。一見すると石造に見えるが実は木造建築で、アーチ部分にのみ切石をあしらい、以外は石造風の木造モルタル（木造平屋建て寄棟瓦葺）になる。この趣向・技巧を凝らした建物こそが、1904（明治 37）年に住友銀行尾道支店として建てられた、ほぼ当時の遺構になる。

住友銀行尾道支店は、住友銀行開設の 1895（明治 28）年に、土堂町の住友家尾道分店がそのまま尾道支店となっていたが、新築された本店、各支店同様に、近代様式による銀行建物が尾道にも求められ、新たに建造されたものである。

1909（明治 42）年頃に増築された際、屋根部分がドーム状になるなど、より装飾性を凝らしたものになったが、時代が下って屋根部分は現在見る形になり、内部も原形を留めないが、外観部は一部分を除いて基本的には当時の形を遺している。

1938（昭和 13）年、土堂町の尾道分店（最初の支店）の位置へ再び新築されて移転。以降はカフェーとなり、戦後に海運局の局舎となり、最終的に尾道市の分庁舎に落ち着き、現在は尾道市労働センターとして利用されている。

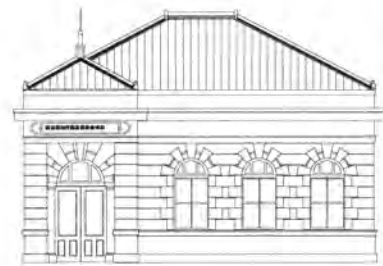
同建物の東には、おのみち歴史博物館として再生されている旧尾道銀行本店の建物（大正 12 年建造・尾道市重要文化財）が遺されており、隣接する駐車場の位置には、国立第六十六銀行が 1878（明治 11）年に開設されるなど、米場町通りはさながら金融街の様相を呈した。そこから市役所一帯の浜辺を俗に「銀行浜」と称した。因みに尾道初の銀行である国立第六十六銀行は、尾道銀行も後に吸収して今に続く広島銀行の前身となる。

米場町時代の住友銀行尾道支店建物の設計・施工を手掛けたのが、住友本店臨時建築部であり、技師長として同部を率いた人物こそが野口孫市であった。

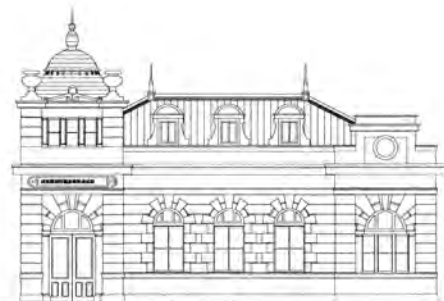


現状風景

尾道市労働センター



1904（明治 37）年立体図



1909（明治 42）年増築時立体図

『広島県の近代化遺産』総合調査報告書（広島県教育委員会）1998

西川龍也氏（福山市立大学教授）作成

## 住友本店臨時建築部

米場町に現存する旧・住友銀行尾道支店の建物を手掛けた住友本店臨時建築部は、「臨時」とあるように、住友銀行本店（大阪）の建築工事にあたって組織され、その完成をもって解散する臨時部門として発足した。1895（明治 28）年の尾道での重役会議（銀行設立決定）を経て始動。

1900（明治 33）年 6 月 1 日に正式発足した臨時建築部は、大阪市北区中之島の堂島川沿いに所在した徳島藩の蔵屋敷跡に事務所が構えられ、その門前で撮られた当時の記念（集合）写真が残る。写真には職員 26 名が写されているが、前列の左から 3 人目が技師長として建築部を率いた建築家の野口孫市であり、その右隣（左から 4 人目）も建築家として名を残す日高胖（ひだか・ゆたか）になり、この二人が建築部草創期のキーマンであった。因みに野口や日高を除く職員中 14 名は、現在の工学院大学の前身となる工手学校（日本初の私立工業実業学校）の卒業生で占められていた。



増築された当時の建物

住友銀行尾道支店（米場町）  
尾道学会蔵



臨時建築部の初仕事となったのは、銀行本店ではなく、住友家の須磨別邸（神戸市）、次いで大阪図書館（現・大阪府立中之島図書館）であった。

関西における迎賓館的機能も担った住友の須磨別邸は 1903（明治 36）年に、住友家の寄贈による中之島図書館は 1904（明治 37）年にそれぞれ完成。須磨別邸は戦災で現存しないが（跡地は須磨海浜公園）、現存する中之島図書館は国の重要文化財である。

そして建築部の本題であった住友銀行本店（住友総本店）は 1908（明治 41）年に完成を見、その前後に尾道を含む新居浜、神戸、京都、横浜、東京、福岡、熊本、呉などの主要都市に支店が開設された。因みに現在の三井住友銀行本店（大阪市中央区北浜、住友ビルディング）はこの当時の建物ではなく（大正末～昭和初期の建造）、当時の本店建物は関西大学へ移築寄贈されている。

その後も住友関連施設の設計・建造を手掛け、その実力を住友内外に知らしめた臨時建築部は、1911（明治 44）年に住友総本店営繕課に改組される事によって、臨時的組織から常設組織へと昇格した。住友ビルディング建設時期には住友合資会社工作部となり、その後一時期、住友から離れて独立した建築事務所となるも、終戦直前に再び住友に復帰し、戦後には日本建設産業株式会社と社名が改まり、1950（昭和 25）年より日建設計工務株式会社、そして 1970（昭和 45）年より株式会社日建設計として現在に至っている。



創業時の住友本店臨時建築部一同

前列左から 3 人目が野口孫市  
住友史料館蔵

## 住友お抱えの名建築家・野口孫市

姫路の出身で、父は旧・姫路藩士、母は姫路藩に仕えた儒学者の娘であった。

因みに姉の野口幽香（本名・ゆか）は、日本の幼児教育の先駆者として歴史に名を残す。

父親の転勤により姫路から神戸へ移り、兵庫県立第一神戸中学、第三高等学校卒業後、住友の奨学金を得て東京帝大（現・東大）工科大学造形学科へ進み、大学院では家屋の耐震構造についての研究にあたり、1906（明治 39）年に発生したサンフランシスコ大地震では研究者らと渡米し、震災現場を調査している。

卒業後の 1896（明治 29）年に通信省へ入省したが、3 年後の 1899（明治 32）年に住友から招かれて入社。銀行建築の調査で欧州各地を視察し、ヴィクトリア朝末期のロンドン建築など、本格的西洋建築を見聞学習した。帰国後の 1900（明治 33）年に住友本店臨時建築部が発足すると、技術部門トップの技師長と

して活躍する。亡くなる 1915（大正 4）年には、文部省工學博士会の推薦により工學博士の学位が授与された。



野口 孫市

住友史料館蔵

1869（明治 2）年 4 月 23 日～1915（大正 4）年 10 月 26 日

## 別子銅山と尾道～銀行以前のキーワード～

尾道と住友を繋ぐ銀行以前のキーワードが、住友が操業した愛媛県新居浜市の「別子銅山」である。

別子銅山は江戸時代の 1691（元禄 4）年、幕府から採掘権の許可を得た住友によって採掘事業が始まり、閉山する 1973（昭和 48）年 3 月までの約 280 年間、65 万トンにも及ぶ銅を産出した世界最大級の銅山として知られた。

銅山に従事する人々とその家族関係者ら約 3800 人（最盛期）が生活したその跡は、歴史・産業遺産として今に伝承され、また、標高 750m の山中に広がった空中都市から、東洋のマチュピチュ（南米アンデスに見られた空中都市）とも称され、現在では観光スポットとしても親しまれている。

別子銅山から産出された銅は、新居浜沖に浮かぶししか四阪島（行政区分では今治市宮窪町域）へ運ばれ、島に設けられた製錬所で製錬がなされた。以前の製錬施設は新居浜市の内にあったが、公害問題を受けて 1905（明治 38）年に無人島だった四阪島へ移された経過で、現在は後身となる住友金属鉱山が操業を続けており、関係者以外の島への上陸・立ち入りは禁止されている。

後の住友財閥、今日の住友グループの源流となるのがこの別子銅山であり、住友金属鉱山はもとより、住友重機械工業、住友化学、住友林業などのグループ企業の大半が、銅山事業から派生して生まれ、今日へと受け継がれている。

別子銅山は住友の原点であると同時に、日本の近代化、工業史においても大きな位置づけを持つものである。

この別子銅山と大阪の住友本店を繋いだ中継基地こそが尾道であり、尾道は海と陸双方に通じる交通上の要地であった。加えて商都として尾道の持つ経済力（政治は広島、経済は尾道と称され、当時は経済面では広島市よりも上位だった）にも重きを置かれた上での分店、次いで支店の開設であった事は言うまでもないだろう。

四阪島から出る煙害で、住友側と農民側の賠償交渉（1909（明治 42）年）が行われたのも尾道で、千光寺山中腹に位置する島居家の茶園（別荘）がその会場だったと伝わる。

## 近代化の象徴としての鉄道敷設と尾道駅開業

尾道と住友の歴史エピソードに介在して、一つのポイントになるのが鉄道敷設と尾道駅の開業である。鉄道敷設により別子と大阪を繋ぐ中継基地としての機能が確固たるものになった訳だが、尾道の近代化を最も象徴する鉄道敷設は、それまでの街の風景を一変させる大きな転換点ともなった。

現在のJR山陽本線に後継される山陽鉄道が設立されたのは1888(明治21)年。当時は私鉄路線で、国有化以前は神戸ー下関間を結ぶ鉄道網だった。設立翌年の1889(明治22)年9月の神戸ー兵庫間の開通に始まり、順次西へ延伸されて、1891(明治24)年に岡山、福山、次いで同年の11月3日に尾道まで伸びた。糸崎・三原への延伸は翌年。

海上交通の要地として栄えて来た尾道にとって、鉄道敷設は次の時代の経済発展を促す絶好の機会と思われたが、関係住民は推進・反対に分かれ、一触即発の空気が市中に流れるほどであった。反対派の勢いに押され、一時は市街地を外して北へ迂回し、尾道西端の吉和方面へ出る案も持ち上がったが、その後紆余曲折を経ながらも両者の調停が決着し、当初計画の通り、市街地を貫通するルートで敷設がなされた。

街の東西を貫く鉄道敷設は、山手から本通りと南北へ伸びる社寺の参詣道を分断する事になり、特に亀山八幡宮と常称寺などは隨身門・山門が境内の内から切り離される格好となり、後に国道も敷設されると更にその分断が強まる結果となった。

今に見る尾道駅舎(南側の正面口)はコンクリート造りの現代建築であるが、その骨格部分は戦前から変わらないものとなっている。

駅舎の変遷をビジュアルで辿る一級の資料として、尾道駅を被写体とした写真絵葉書が時系列に複数遺されており、これによって見ると開業当初の初代建物は切妻造の完全和風建築で、この形は山陽鉄道各駅と共通している。昭和初期に出された絵葉書において2代目駅舎が登場しており、この2代目駅舎の形状が今に引き継がれるものである。



1906(明治39)年頃の四阪島製錬所  
住友史料館蔵



別子銅山の集落  
住友史料館蔵



日本初の山岳鉄道となった別子鉱山鉄道上部線  
1906(明治39)年頃

住友史料館蔵



削岩機での採掘風景(明治30年代)

住友史料館蔵



尾道停車場(明治後期)  
尾道学研究会蔵



(尾道港)堂々たる尾道  
停車場の壯観(戦前)  
尾道学研究会蔵



(尾道名勝)国鐵尾道驛(戦後)

尾道学研究会蔵